

皇室と学問

昭和天皇の粘菌学から秋篠宮の鳥学まで

小田部雄次

昭和天皇が、当時まったく無名、無位無冠だった南方熊楠に会い、遠路、軍艦で紀州に出かけたことから、何かが始まった

荒俣宏 (博物学者)

学問でしか自己実現できない？
皇族の“私的関心”が明らかに！

辻田真佐憲 (近現代史研究者)

皇室の学問研究が
顕す、もう一つの
日本近代史

皇室と学問

昭和天皇の粘菌学から秋篠宮の鳥学まで

小田部雄次

星海社

210



SEIKAISHA
SHINSHO

昭和天皇の生物学研究、平成の天皇の魚類研究、令和の天皇の水の研究など、近代以後の天皇の学問好きはよく知られる。しかし、どうして天皇は多忙なかで学問研究を続けるのだろうか、その理由はあまり知られていない。そして私的な趣味であるはずの天皇の学問研究が、一般社会とどのように関わっているのだろうか、その実態はさらに知られていない。

古来、学問を好んだ天皇は少なくない。とはいえ、近代以前の天皇の多くは和歌や漢詩、有職故実ゆうしやくこじつなどに関心があり、動植物や魚類などの研究を生涯のテーマにした天皇はほとんどいない。近代以後でも明治天皇や大正天皇には、乗馬や刀剣蒐集しゅうしゅうや犬の愛玩あいがんなどの趣味があったが、いわゆる学問研究とは異なる。

そもそも、天皇が近代的な学問体系を学ぶのは、昭和天皇以後であり、明治天皇や大正天皇は、近代的な学問教育を体系的には学んでいない。昭和天皇の代になって、将来の天

皇となるべき帝王学や基礎教養の意味もあって、倫理^{りんり}、歴史、文学、物理、化学のような科目を学び、いわゆる文系、理系というような区別もできあがっていった。その意味では、近代的な学問体系に基づいた天皇の学問研究は、昭和天皇以後にはじまったといえる。

昭和天皇は、はじめは史学研究の道に進みたかったといわれる。しかし、将来の天皇が天皇の歴史を学問的に研究することの不具合を感じた側近らの反対で、実現しなかった。結局、昭和天皇は理系の道を進み、博物学への関心を高めた。

丁宗鐵^{ていむねてつ}『天皇はなぜ生物学を研究するのか』は、博物学は西欧の上流階級のたしなみであり、日本でも江戸時代の大名に博物趣味があったことなどを指摘する。一方、江戸時代のシーボルト来日による蘭学^{らんがく}の発展などで、近代日本の博物学の源流ともいえる本草学への関心が高まり、たとえば公家^{くげ}で五撰家の一条忠香^{いちじょうただか}（明治天皇の后^{きさき}となる昭憲皇太后^{しょうけんこうたいごう}の実父）などが京都の本草学者である山本亡羊^{ぼんぼう}の門人であったことは、愛知県西尾市の岩瀬文庫の収蔵品などからも知られている。

昭和天皇の博物学研究は、こうした西欧や日本の伝統的な流れに沿った面があったのは確かだろう。さらに、顕微鏡の発明と普及が生物学の発展に寄与するのだが、顕微鏡は當時は高価であり、上流階級ならではの「特別な趣味」であったともいえる。なお、昭和

天皇が博物学のなかでも、競合する研究者が少ないヒドロゾア研究の道を選んだのは、天皇である自分が、資金力も人脈も乏しい研究者の将来を妨げることを懸念したからと伝えられる。

平成の天皇も、ハゼの分類学やタヌキの生態学で知られるように、生物学研究の「趣味」を持った。「趣味」とはいえ、1980年（昭和55）に魚類学への貢献で、イギリスのロンドンにある分類学・博物学の研究と普及を目的とした学術機関であるロンドン・リンネ協会の外国会員になった。昭和天皇も1932年から、リンネ協会の名誉会員となっており、父子ともども、趣味の範囲の研究に終わらず、国際的な生物学者としてその名を知られ、「文化国家日本」のイメージを世界に広めたのである。

毛利秀雄『天皇家と生物学』は、昭和以後の天皇家が三代にわたり生物学研究者として国際的に活躍してきたことを広く紹介している。厳密には三代目の令和の天皇は、先の二代の天皇とは異なり、史学科に進み、「道」への関心から水運、そして水と社会の問題へとテーマを発展させていった。むしろ、令和の天皇の弟で、現在は皇嗣こうしとなった秋篠宮文仁あきしののみやふみひと親王が、ナマズや鶏の研究を重ね、先の二代の天皇の生物学研究の流れにある（なお、本書では煩瑣を避けるため、「親王」「王」「内親王」「女王」の称号は原則として初出のみに付けた）。

ちなみに、昭和天皇の弟の三笠^{みかさのみやたかひと}宮崇仁親王は、日本における古代オリエント史のパイオニアであり、大学講師にもなった歴史教育者である。その孫の彬子女王^{あきこ}もジャポニズムの研究者として現在も活躍している。さらに、平成の天皇の弟である常陸宮正仁親王^{ひたちのみやまさひと}は学習院大学理学部化学科を卒業し理学士の称号を得て、その後、東京大学大学院理学研究科研究生となり、動物学を専攻した。公務のかたわら癌^{がん}の病理学的研究を続け、公益財団法人がん研究会癌研究所の客員研究員を務めてきた。令和の天皇と秋篠宮の妹である紀宮^{のりのみや}（のち黒田清子^{くろたさやこ}）は、鳥類の研究者として知られ、山階鳥類研究所^{やましなちようるいけんきゅうじょ}の非常勤研究員などを務めた。

生物学にせよ、「水」にせよ、歴代の天皇や皇族が独自の研究テーマを生涯続けようとす
る背景には、天皇あるいは皇族という立場からくる制度的、心理的制約が関わっているよ
うだ。とりわけ、近代国家においては、天皇の地位や職務などが憲法で明記されており、
天皇は天皇としての地位と職務を全うしながら一生を生きることとなる。そうした地位や
職務を放棄するわけにはいかず、常に一定の制約の中で生きなければならぬ。専制的な
王制国家であれば、王の私的欲望の実現を生涯かけて求めることもできようが、憲法に制
約された立憲的な王は、私的欲望の実現のみで生きることができず、公的義務が優先され

ることが多い。このため人生での自己実現の機会が少なく、それを何かで補おうとする心の動きが生ずるのは当然といえ、当然であろう。

とはいえ、その補い方には一定の限度もある。企業経営で利潤^{りじゅん}拡大を求めれば一般社会との競合が生まれ、国民の象徴たる天皇の行為としては望ましくない。内廷費^{ないてい}の余剰^{よじょう}金が宮内官僚^{くわい}などの名義で株式投資などに充てられていることは、すでに知られる事実だが、天皇の個人名で投資しないところにそれなりの自制や配慮が感じられる。宮内官僚などが関わることで、天皇個人の財産ではなく、国の公金を保管し運用しているという理由がなりました。それでも、資産運用は危うい「賭け」でもあり、現に株の暴落で、天皇家の相続財産が損失を被ったことは知られている。天皇家が一般社会と経済的利益を競うような事態は、避けるほうが無難なのである。

対して、学問研究や芸術活動であれば、一般社会との経済的競合関係の場合からは遠ざかる。また、その行為が天皇の「高貴性」を汚すこともない。かつ限られた時間を有効活用することができるので、多忙な天皇には適合しやすい活動といえる。

もともと、学問研究も芸術活動も、その道のトップレベルとなると、一般社会との競合の機会も増えるし、かつ活動の時間も増えて、私的行為の範囲を逸脱する危険も生ずる。

一般社会との競合を避けるための適切な距離は置くべきだろう。その意味で、平成の天皇のチェロは主に家庭内での演奏が多く、令和の天皇のピアノもオーケストラでの演奏はあ
るがプロとしての演奏活動には踏み込んでいない。

芸術活動に比べて、学問研究のほうはかなり専門的である。昭和天皇も、平成の天皇も、
令和の天皇も、その分野での第一人者の地位を得ている。学問研究は天皇の私的行為では
あるが、天皇という制度的立場からくる避けがたい精神的欠如を補填する必要不可欠の行
為となっているため、研究に注ぐ時間も情熱も多くなるのだろう。しかも、競合する研究
者が少ない分野であれば、一般社会との利害の衝突はさほどはない。

では、天皇とならない他の皇族たちはどうなのだろうか。天皇ほど束縛がなく、自己実
現の機会への欲求が強くないためもあつてか、すべての皇族が学問研究をしているわけ
はない。本書では、元皇族であつた山階芳麿やましなよしまるの鳥類研究、三笠宮崇仁の古代オリエント史
の研究などをとりあげたが、どちらかといえば、皇位継承とは関わりのない立場の皇族の
趣味的な営みが、学問研究に発展した感が強い。秋篠宮文仁の研究も、当初は皇位継承と
は関わりのない立場の皇族の自由な趣味的な傾向が強く、その後には皇位継承者になること
で、その自由で趣味的な傾向に少なからぬ差し障りが出てきたようにもみえる。

鳥の研究者の秋篠宮が山階鳥類研究所総裁の「ご公務」に就いていることは有名だが、2021年（令和3）1月29日には、山階鳥類研究所研究成果発表会があり、「令和2年度文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）」による研究事業」の研究成果発表会が秋篠宮邸とオンラインでつながってなされている。皇族が総裁をつとめる組織に研究補助金が支給されるということに違和感を覚える人もあろう。またその発表会がオンラインで宮邸とつながっていたことにも驚くかもしれない。つまり、皇族の私的趣味である学問研究が「ご公務」となることで、ひとつの利権サイクル、つまり皇族の名誉を特定の組織が活動資金の捻出に利用するという危うい状況のなかに置かれてしまったのである。秋篠宮家の「ご公務」には、そのことへの慎重さが欠けはじめてるように見える。

従来は、天皇や天皇となるべき皇族の研究は、あくまで私的行為の範囲の中でなされてきた。憲法で規定された天皇の職務は国事行為のみであり、皇族はそうした天皇の活動を支える存在である。そのほかの伝統行事の継承などの行為は、私的行為として国民への強制力をもたないものとされている。また、慣行として、海外親善訪問や国民体育大会や植樹祭などへの行幸啓、被災地慰問などは公的行為と位置づけられ、いわゆる「ご公務」と呼ばれている。この「ご公務」への法的規定はなく、政府や国民の暗黙の了承のもとでな

されており、年々、拡大する傾向にある。そのため天皇が多忙となり、高齢化によって天皇としての象徴の務めが難しくなる事態も起きはじめた。増やし過ぎた「ご公務」を遂行するために、皇族を増やせという議論も一部にある。増やし過ぎた「ご公務」の見直しを先に論ずるべきなのに、本末転倒な現象が起きている。

昭和天皇の場合は、国事行為やいわゆる「ご公務」の合間に時間を見つけて研究を続けていた。また、民間の研究者との競合をできるだけ避け、学位も持たないし、研究職に働くこともなかった。

平成の天皇も、学位は持たず、研究職にもついていない。ただ、その魚類研究が全国豊かな海づくり大会という「ご公務」（公的行為）と結びつくようになったのが、新しい動きだった。また、国際親善で訪問したタイで、タンパク資源としての魚類を紹介し、それがタイ国民を潤したということもある。

令和の天皇は、修士の学位を持つ。研究職にはつかないが、専門の水の研究について大
学や国連などで講演をすることがある。「ご公務」先で、寸暇すんかを見つけて、研究のための資料集めなどをしてしていると伝えられるが、学問研究という私的な趣味を、「ご公務」にしているわけではない。

天皇になることが予定されなかった皇族であった山階芳麿は、皇籍を離脱して軍人の職から解放され、一民間人として好きな鳥類研究の道を歩み、山階鳥類研究所を設立し、鳥類研究や鳥類保護に生涯を費やした。

また、三笠宮崇仁は、天皇の末の弟という立場にあり、戦後の自由な時代に大学で学び、東京女子大学などの教壇に立つなど研究職にも就いたが、学位は持たなかった。イランやイラクの旅など、私的研究と国際親善という「ご公務」が合体したようなものだったかもしれない。戦後初期の開放的な天皇制の時代でもあったし、天皇ほどその活動について厳格な「公私」の分離が求められていなかったようにもみえる。

博士号をもち、東京農工大学の客員教授などを務めている秋篠宮文仁は、はじめは将来の天皇に予定されていなかった皇族であったが、のちに皇嗣となった。このため、博士号と大学教員の肩書を持つ最初の天皇となる可能性が高い。秋篠宮の場合、さきにふれた山階鳥類研究所総裁のほか、国際生物学オリンピック名誉総裁になるなど、私的行為である学問研究が「ご公務」と結びつくものが少なくない。これも時代変化のひとつともいえるが、天皇や皇族が、一般民間人と研究補助金の取得や、研究職のポストを競うような事態が増えれば、将来の社会問題に発展する懸念がある。というより、すでにそうした問題

が、あまり認識されないまま進展している。

たとえば、秋篠宮の長女で結婚して民間人となった元内親王の眞子^{まこ}は、東京大学総合研究博物館特任研究員の経歴があるが、このキャリアがニューヨークの博物館での採用試験にも活かされるだろうといわれる。眞子がいかにして博物館員の資格を持ち、なにゆえに博物館員としての職を得られるようになったのかという背景には、父親である秋篠宮の学問研究が「ご公務」と密接につながってきたことがある。

第1章 昭和天皇と生物学研究 23

明治天皇は馬と犬が好きだった 24

大正天皇は犬好き、猫好き 26

三皇孫の好み 28

動物好きの三皇孫 29

歴史か生物学か 32

裕仁、顕微鏡をのぞく 34

裕仁、博物学者になりたいとの希望をもらす 36

服部広太郎 38

生物学研究所 41

ヒドロゾア 43

粘菌学者・南方熊楠 46

天皇への南方の進講 49

リンネ協会名誉会員になる 51

天皇記者会見でのやりとり 54

「雑草という草はない」 59

ダーウインの胸像 61

戦前の欧州旅行での動植物観察 65

生物学者としての訪欧 67

米国の海洋研究所訪問 71

皇居と御用邸の自然 75

山階宮芳麿王と山階鳥類研究所

「鳥類学の権威」 80

父・菊麿の影響で鳥好きに 82

陸軍勤務のかたわらで 84

鳥類学者への道 85

山階鳥類研究所の設立 88

鳥学の仲間たち 89

「ブラキストン線以北における鳥類の分布」 93

小熊捍教授との出会い 95

空襲で焼けずに残った標本 97

オースティン博士との出会い 99

日本鳥類保護連盟の発足 102

鶏の増産の研究 103

カシミ網、空気銃の制限とトキの保護 105

第3章

三笠宮崇仁親王と古代オリエント史研究

117

渡り鳥保護条約 107

ヤンバルクイナの発見 109

千葉県我孫子市に研究所移転 111

紀宮清子の鳥類研究 112

島津久永と鳥の関わり 113

昭和天皇の14歳下の弟 118

「神話＝歴史的事実」という考えを否定 119

歴史学への目覚め 123

東大の研究生として 127

ハーバート・ノーマンから英語を学ぶ 128

池田徳真の書籍を譲ってもらう 131

パラフ会 134

日本オリエント学会の誕生 138

東京女子大の講師となる 142

ラジオ放送「古代文明の光」 147

翻訳書の刊行 149

スライド製作 152

古代エジプトの神々と日本神話 157

神と王権と民衆 161

紀元節復活問題 162

彬子女王と「心游舎」 169

第4章 平成の天皇とハゼの分類

173

動物に囲まれたくらし 174

沼津御用邸 175

魚好きの明仁 177

海水魚を飼う 181

なぜハゼか 183

侍従長・渡邊允の回想 186

富山一郎の勧め 189

昭和天皇との思い出 191

全国豊かな海づくり大会 193

ブルーギル 197

タイの「天皇の魚」プラー・ニン 202

皇居のタヌキ 204

リンネ協会外国会員として 213

第5章

令和の天皇と水の研究

217

プリンス岬の夏 218

道への興味 221

中世における瀬戸内海水運について 224

オックスフォード大学での研究 227

「17〜18世紀におけるテムズ川の水上交通について」 232

「日本に馬車がないのはなぜか」 238

京都の水運 242

江戸の水運 247

東日本大震災と水災害への関心 251

世界の水問題への視野 257

第6章

秋篠宮文仁親王とナマズと鶏

267

「青大将」を飼う宮様 268

人間探究派の兄と動物探究派の弟 272

研究目的の海外旅行 275

プラー・ブックとの出会い 278

『多摩川流域における魚類民俗に関する研究』 281

ナマズ・グッズ 285

プラー・ブックの生態 287

プラー・ブックにまつわる伝承 290

漁法と儀礼 292

鶏への関心 296

『鶏と人』 300

『鳥学大全』 303

文仁の研究への評価 305

第1章
昭和天皇と
生物学研究



顕微鏡で観察する昭和天皇
(サン・ニュース・フォトス『天皇』表紙、トツパン、1947年)

明治天皇は馬と犬が好きだった

古来、学問好きの天皇は多かった。84代の順徳天皇は朝廷の儀式作法などを調べ、有職故実の解説書である『禁秘抄』をまとめている。しかし天皇の学問の多くは詩歌管弦や書などであり、近代以後の生物学などの自然科学につながる学問、たとえば本草学への関心はあまり強くなかったようだ。幕末の公家であり昭憲皇太后（明治天皇の皇后）の実父である一条忠香が本草学者の門人であったことは「はじめに」でも述べたが、歴代天皇が本草学にどこまで関心を持っていたのかはあまり詳らかではない。そもそも本草学の源流は医学であり、診断され治療される存在の天皇は、自ら医学を専門的に学ぶ必要もなかったろう。

近代以後も明治天皇は和歌、大正天皇は漢詩などに造詣が深かったが、自然科学への関心は興味程度だった。1909年（明治42）刊行の坂本辰之助『皇室及皇族』には、明治天皇ほか皇太子嘉仁（明宮・のちの大正天皇）、三皇孫（迪宮裕仁・のちの昭和天皇、淳宮雍仁・のちの秩父宮、光宮宣仁・のちの高松宮）らの当時の生活様式や趣味などが記されている。

同書によれば、明治天皇の嗜好は、和歌のほか、乗馬、刀剣、猟犬、美術工芸品などで

ある。乗馬や獵犬を好んだというのは、馬や犬などの動物好きであったという意味もある。とりわけ乗馬は大元帥だいげんすいとしてのたしなみでもあり、近代の歴代天皇は明治、大正、平成、令和とみな乗馬経験があり、馬に詳しい。

明治天皇は、「外国産馬は体格は善けれど弱くて不可いけ第一ひつめに蹄ひづめが弱い」と周囲に語っていたほど、小型の在来馬を好んだ。なかでも、宮城県栗原郡鬼首村産の金華山号きんかさんごうを寵愛ちようあいし、觀兵式や演習の際に乗った。金華山号の後は、福島県磐城国田村郡産の三春駒の友鶴ともづる号を愛用したという。明治天皇は「日本国の皇帝が自国産の馬をば乗用することは至当の事にはあらずや。日本は日本の日本にて外国模倣なひし乃至外国に作らるる国にあらねば、日本の馬に悪しき所は研究して改良し、成るべく外国産馬を用ゐざるやうにしたきもの」とも述べていた。このため宮内省主馬寮しゅめりょうでは、種馬以外は外国産馬は扱わなかったという。

獵犬の趣味も深く、代々木の25万坪の御料地に獵犬の飼育場を設けたほどである。当時の飼育担当である溝口幹知は1913年に『獵犬の飼育と訓練』を著しているが、1901年以来、76頭を飼育したという。獵犬は外国産が多く、フランス、イギリスなどのほか、中国産の狃ちん、蒙古種もうこなど、多様であった。ドイツのビスマルクに似ているので「ビス」と名づけた犬もいた。飼育場には一頭につき一つの犬舎があり、鉄柵へだで隔て、運動場も広く

竹柵をめぐらし、時々発砲し猟の練習をし、訓練ができた犬は猟に連れていき実地演習をさせた。また、犬と苑内の散歩も楽しんだ。明治天皇の馬は軍服用、犬は猟と散歩用であった。

大正天皇は犬好き、猫好き

先の『皇室及皇族』は、皇太子時代の
大正天皇（嘉仁）の趣味として、茶道、新発行の金銀貨や紙幣の収集、世界の勲章の知識、美術品鑑識、将棋、自転車などのほか、犬と猫をあげる。犬は愛犬舎と名づけられた飼育場に67頭おり、朝夕二回放ちてともに遊ぶという。猫犬というより愛玩用である。同書は、以下のように記す。

犬は高麗縁こうらいべりの畳の上を、走り狂ふと見れば、忽ち御庭先の芝草の上に戯れかかるを見る、衣桁いこうには美麗に縁飾せる色々の着物かけられ、華美なる座布団も敷かれたり。犬も犬も食餌は、中々贅沢にて、牛乳及び牛肉を常食とするは言ふまでもなく、病あれば官医の診察を受けて、高価の薬を吞ませらるるよし。

皇太子時代の嘉仁は健脚で、暇があれば山野を跋渉し、狩猟を好んだ。徳川慶喜とは猟仲間で、ともに静岡県の鯨ヶ池で猟をした記録や碑も残る。坂本によれば、嘉仁の猟には土谷宇兵衛という山の地理や獲物の所在に詳しい、勢子を指揮する男がついていったが、あるとき、まったく獲物がなく、土谷は自宅の兎うさぎを放ち、嘉仁に撃たせようとした。しかし嘉仁は不興の面もちで、予は足の悪い兎は「打つまじ」、と言った。さらに、兎は足が悪いうえに、「山地に慣れざる模様を見ゆるは、まさしく飼兎なるべし」と述べ、語気をつよめて、こう語った。

顧おもふに、本日の猟に、一の獲物もなきより、予の不興にあるべしと思ひて、飼兎を放ちたるものなるべきか、甚だ心得ぬ業なり、予は猟を好めど、漫みだりに生けるものを殺すことを好まず。只山野を跋渉して、身体の保養ともなり、晴朗の空気を呼吸して、自ら慰むものなるに、何を苦しんで、獲物なきを悲しまんや、況まして片足跛なえたる兎を放つは、甚だ心得ぬこと、云ふべし。

周囲は恐縮して、飼兎を見抜いた嘉仁の眼力に驚いたという。

愛犬の話にも猟の話にも、いかにも動物好きの嘉仁らしさがある。こうした明治天皇や大正天皇は生物学研究の道に進むことはなかったが、両天皇の動物好きは、以後の天皇家にも継承された。

三皇孫の好み

『皇族及皇族』によれば、皇孫の裕仁（1901年生まれ）と雍仁（1902年生まれ）が学習院初等学科で「最も優れて他生に秀で給ふは算術」とある。歴史も好み、なかでも義家、義経、頼朝、秀吉、清正などの武将の談話を喜んで聞いた。歴史絵を見れば、誰が誰かわかっていたという。また、裕仁はアメリカの「リンコルン（リンカーン）」を好んだとある。趣味は相撲^{すもう}、将棋、唱歌、絵画、武事、遊泳などで、動物や乗馬のほか、博物採集なども好んだ。

乗馬は大元帥となる天皇にとっては重要な技術でもあった。もともと幼い皇孫の御用邸は木馬のみなので、青山御殿（東宮御所）内で本物の馬に乗ったところ、木馬では物足らなく思い、裕仁は「淳^{あつ}さん「淳宮、雍仁の幼名」本当の馬が好^いいね」「内は著者による補足、以下同様」と述べ、雍仁は「然^さで御座います、本当の馬が面白^う御座います」と裕仁に

賛成し、乗馬の稽古を申し出たという。雍仁ものにちに陸軍軍人として馬を乗りこなすことになる。

宮内庁編『昭和天皇実録』（以下『実録』と略す）によれば、1907年6月23日、皇太子嘉仁は、満6歳の長男・裕仁と、2日後に5歳になる次男・雍仁を、交替ではじめて馬に乗せた。10月20日、裕仁は主馬寮赤坂分厩で朝鮮馬を見、新たに完成した鞍をつけ「隠岐島」号に乗った。これが裕仁の最初の乗馬とされる。翌08年9月12日、21日、10月12日に、裕仁は主馬寮で御料馬「会寧^{かいねい}」に乗っている。

1911年4月7日に調馬師3名が前後について「会寧」に乗り、同27日に主馬寮分厩で裕仁の正式の乗馬稽古が開始された。「会寧」で埒内^{らちない}10周、並足20分だった。5月2日、車馬監の根村^{ねむら}当守が裕仁の乗馬主任となった。乗馬は近代の歴代天皇のたしなみであり、また親愛の情をもって動物と直接に触れる機会でもあった。

動物好きの三皇孫

『皇室及皇族』は、三皇孫の動物好きについて、「猛獣たると家畜たるとに論なく、可愛い小犬にても、恐ろしき虎、熊、獅子の類にても、平等に好ませられて、一一其性質を御存

知あり」と書いている。そして、時々上野の動物園に行き、帝国博物館主事久保田鼎や同技手の黒川義太郎の案内で1号室から順次見学したという。同書には、三皇孫の動物園での様子について、こうある。

象の前にては暫く御歩みを止め給ひ、更に猿及び鹿には、三殿下共餌を与へられ、新入の珍客天狗猿には御手を触れさせ給ひ、ナマケモノには、光宮「のちの高松宮」殿下御手づから林檎を与へさせられたり。鱷蜥蜴は未だ陳列の運びに至り居らざりしかば、仮室にて御覧に入れたり、斯くて御馴染の手長猿及び北極熊に痛く興ぜられし後、園内東南隅の御休憩所にて、約二十分程御休憩中、『手長猿を此処に連れ来る事出来るか』との仰せあり。黒川技師「技手」は謹んで御受け申し、室内に入れたるに、三殿下には、猿が例の如く長き手を以て、御前に悪戯ふざけ廻り、果は恐れ気も無く、芝生の上に飛び歩くを御覧ぜられ、此上なく御満足の体にて御還啓遊ばされたる事ありき。

『実録』にも裕仁の幼少時からの動物などへの関心が適宜記録されている。1902年（明治35）、満2歳の裕仁は6月2日に母の皇太子妃節子さだこからニワトリの玩具を、翌3日に祖母

の皇后美子はみこから木馬をもらった。03年10月8日、浜離宮で魚釣り、投網をし、漁獲のボラを昼に、クロダイを夜に食した。同16日、代々木御料地でブルドッグなど各種の犬を見ている。

日露戦争開戦翌年の1905年5月22日、裕仁は雍仁とともに、満州軍総司令官大山巖おおやまいわおらから献上されたロバ2頭を見た。06年3月16日、三嶋大社から献上されたハト3羽を持ち帰り、飼育ののち放生した。同31日、沼津の大山巖別邸海岸の洞窟うぼがふところ（姥ケ懐）付近でイソギンチャクを探した。4月2日、沼津の牛臥うしぶせ付近でドジョウすくいをした。

07年4月8日、三皇孫で上野の帝室博物館附属動物園に出かけ、久保田主事や黒川技手の案内で、キリンを見た。日本に渡来した最初のキリンであり、同月3日から公開されていた。

上野動物園は1882年3月20日に農商務省博物局附属の動物園として開園し、86年に宮内省の所管となった。以後、イタリヤのチャリネ曲馬団で生まれたトラをはじめ、アジアゾウ、フタコブラクダ、ドイツのハーゲンベック動物園からのライオンやホッキョクグマが集められた。そして1907年にキリンが届いたのである。

裕仁ら皇孫は、当時としては珍しい動物を見学するため、その後もしばしば上野動物園

に行った。上野動物園は、のち1924年（大正13）の裕仁（このころは皇太子）の成婚を記念して、上野公園とともに東京市に下賜される。

この間、皇太子の生物好きが知られ、さまざまな標本、剥製、生きた動植物が献上された。1912年6月26日には、南極大陸を探検した白瀬^{しらせ}轟^{のぶ}からペンギンの剥製が届いた。翌13年9月26日にはトラック島で捕獲されたタイマイ（海亀）が、14年5月21日にはワニが献上された。ハチドリ、五色鳥、ムササビの標本もあった。

歴史か生物学か

裕仁は、はじめ歴史にも関心があったが、将来の天皇が歴史や政治を専門的に学ぶのは、南北朝問題や西洋の政治革命などにも関わるので好ましくないという西園寺公望ら側近の判断もあり、次第に生物学研究に時間を割くようになったともいわれる。このことについて、裕仁自身は、天皇になって在位50年式典が行われる前の1976年（昭和51）11月6日の吹上御苑の林鳥亭での記者会見で、以下のように回想している。

私は歴史を学ぶ途中で生物学に興味を持つようになりました。学問的なものではない

が、初等科の頃、沼津や葉山で貝を集めることを楽しんだ。

学校に入ってから松村松年の立派な昆虫図鑑の本をひもどき、それで昆虫の名前を決めたこともある。幸い、私の侍女と松年は懇意であった。侍女は足立タカ、のちの鈴木貫太郎夫人ですが、少しわからないと松年に昆虫の名前を調べてもらった。

そういう関係で、生物学の方は小さい時から「三つ子の魂百まで」で、趣味はどうしても生物の方だった。

歴史に私が興味を持っていたのは、御学問所の時代であった。主として箕作博士の本で、一番よく読んだのは、テーベの勃興からヨーロッパの中世時代にわたる、英仏百年戦争の興亡史であった。

箕作の本に興味を持ったのは、第一次大戦の戦争史で、そういう戦争や政治史に関係したものに、興味があった。歴史の基礎はできていた。深くやるのは、そういう方面が好きだったからだ。

いろんな人から利用されるおそれもあつたし、健康の方からいっても、座禅的なものだったから、生物学をやるようになった。

ちなみに、松村松^{しょうねん}年は日本の昆虫学の創始者、箕作博士は箕作^{みつくりげんぼち}元八で西洋史学の第一人者だった。

裕仁は歴史も好きだったが、歴史は利用されやすいこと、座禅的なこと（座学という意味だろう）などから、野外で動き回り健康上も好ましい生物学を選んだという。もつとも、歴史学への関心も深く、将来は国家元首となり大元帥となる裕仁にとって、政治や軍事の専門的な知識も必要であった。趣味や遊興三昧で政治や軍事に無知な天皇では、側近も困ったはずだ。政治や軍事は、あまり探究しないことが肝要であって、探究するのであれば、生物学、それも研究者が少なく、政治や軍事に影響しない粘菌^{ねんきん}研究の道が無難だったろう。

裕仁、顕微鏡をのぞく

さて、1906年12月31日、裕仁は養育掛長の丸尾錦作に将来の進学希望を問われ、高等師範学校と答えた。雍仁は高等師範学校に入り、その後、陸軍の学校に行くことと答えた。ともに先生を希望していたのだ。天皇にならない次男の雍仁は将来は陸海軍のどちらかの軍人になることになっていた。陸軍の学校を考えたのだろう。まだ5歳と4歳の子供なので、漠然とした希望だが、勉強の世界が気に入っていたのは確かなようだ。

08年2月27日に、裕仁は4月より学習院初等学科に6年間就学することが決まり、乃木のぎ希典まれすけ学習院長は、初等学科主任に「将来陸海の軍務につかせらるべきにつき、其の御指導に注意すること」などの覚書を作成させた。日露戦後でもあり、乃木の質実剛健の教育が学習院の気風となった時代である。その乃木も明治天皇崩御の後の12年9月13日に自刃した。

この間、裕仁は軍事講話を聞いたり、軍艦「相模」に乗艦したり、将来の大元帥としての素地を作っていた。他方、動植物や貝への関心も高まり、採集や顕微鏡観察などもした。三皇孫は、もともと幼児期から博物採集への関心は高かった。本の昆虫、四足獣、草木などの挿入絵への興味から、裕仁と雍仁は（当時、弟の宣仁はまだ幼かった）、御用邸滞在中には昆虫および植物の採集器を担い、捕虫網を手に、野原を歩き回り、採集の昆虫は絵本で調べ、摘んできた草花は、三皇孫がそれぞれの卓上の花瓶に挿したという（『皇室及皇族』）。

『実録』には、裕仁の初等学科入学後の08年7月の葉山の避暑中に、昆虫、貝、草花の採集、魚捕をしたとある。9月26日には新宿御苑でバッタ、ムカゴなどを採り、27日には浜離宮でコオロギを獲った。11月22日、新宿御苑で拾った木の実がカンナとの説明に納得せ

ず、自らタイザンボクであることを確かめている。09年5月30日には養蚕所ようさんでカイコを顕微鏡で見ている。顕微鏡の歴史は古く、日本にも幕藩時代の1750年ごろにオランダから伝わったとされている。日本で工業的に作られた最初は07年の田中杢次郎の田中式600倍顕微鏡といわれ、これは皇太子嘉仁に献上されている。裕仁が用いたのは、あるいはその顕微鏡かもしれない。

裕仁、博物学者になりたいとの希望をもらす

さらに裕仁は、同1909年6月13日に水棲虫類の採集、17日にアルコール漬けのホタルイカの観察、18日に日食観測をした。10月4日に浜離宮で虫捕りをし、名和昆虫研究所の様子を聞いた。名和昆虫研究所は、ギフチョウの命名者である名和靖が、害虫駆除や益虫保護の研究のため1896年に設立し、名和の子孫が館長をつとめ、現在も岐阜市にある。

翌1910年1月19日、沼津御用邸で貝の分類整理をした。3月20日には海藻を採集し、侍女に押し葉作成を命じている。10月1日に学習院への通学がはじまり、昆虫魚介標本を持参した。19日には農商務省水産講習所でカツオブシに生じる菌類を顕微鏡で観察。こう

した裕仁の活動のため、11月24日には旧明宮（嘉仁）御殿を皇孫仮御殿内に移築し、新標本室としている。

こうした幼児期、少年期の体験を重ねて、裕仁は動植物や貝類への関心を強め、1913年12月29日、満12歳の裕仁は「博物博士」になりたいとの希望を側近に漏らした、と『実録』にある。

ところで、明治天皇や大正天皇は動物好きでありながらも、なぜ裕仁のように生物学研究の道に進まなかったのだろうか。理由の一つは、時代の違いだろう。幕末・明治の政治的動乱期にあつて、京都の公家から突然に国家元首となった多忙さは、生物学はおろか、学問研究の時間的余裕を与えられなかっただろう。それでも大正天皇には時間的余裕があった。しかし、大正天皇は生来の病弱のため、健康維持のための行啓が重んじられ、学習院での教育も十分にこなせる状況になかった。大正天皇自身は多くの事柄に深い興味を示していたが、持続的で緻密な研究というスタイルは体質に合わなかったようだ。

第二に、近代学問を学ぶ体制が整備されていなかったこと。裕仁の時代には、近代の学問全般を学ぶにふさわしい環境作りができていた。裕仁は、学習院初等学科や東宮学問所で、裕仁を中心にしたカリキュラムや指導教師のもとで体系的な学びができたのである。

しかも裕仁自身そうした体制になじみやすい力量と気質があった。それでも、学科の好みはあり、算数より理科、文学より歴史に関心が高かった。理科の好みは、生来の動植物好き、採集好きを刺戟して、生物学への道になったのだろう。

他方、裕仁、雍仁、宣仁の三皇孫はともに同じような教育を受けながら、裕仁だけが生物学を生涯の研究としたのだが、そこには、将来の天皇となる者と、ならない者との違いがあったようだ。裕仁は国家元首、大元帥の責任ある地位に就くが、現場での肉体活動をとまなう義務は少ない。雍仁と宣仁は、それぞれ陸軍と海軍に進み、職業軍人として行軍や艦隊作業などに従事した。軍の宿舎で寝食し、一般兵士らとの交流も多い。しかも、皇族として外国要人接待の晩餐会ばんさんや視察などの公務もある。天皇よりある意味、多忙である。対して、天皇は他の皇族と比べて、多くの要人と関わり、自由時間が少ない。不自由さのなかでのわずかな「自由」が、生物学研究に没頭している時間だったのだろう。またまった時間がなくても、こまめに積み重ねていけるのも利点だろう。

服部広太郎

1914年4月、すでに皇太子となっていた裕仁が、学習院初等学科を卒業した。その

後は、中等科には進学せず、新たに設置された高輪の東宮御所内に設けられた東宮学問所で5人の学友とともに、7年間の教育を受ける。設立の発案者は学習院長だった乃木希典だったが、すでに亡く、学問所総裁には東郷平八郎（とうこうへいはちろう）が就任した。日露戦争の両雄、陸軍の乃木、海軍の東郷が関わった東宮学問所は、将来の国家元首かつ大元帥となる皇太子のための特別な教育機関であった。

科目は倫理、国文、漢文、歴史、地理、地文、数学、理化学、博物、フランス語、習字、美術史、法制経済、武課、体操、馬術、軍事講話である。馬術や軍事講話をのぞけば、一般の中学校の科目と同じである。当時、外国語は宮中ではフランス語が主流であった。

東宮学問所の教育の主たる目的は、帝王教育であり、なかでも倫理が主流だった。その担当教師は杉浦重剛。杉浦は日本中学校という私立中学校の校長で、ほかの教員が東京帝国大学や学習院の教授や外務官僚、陸海軍軍人であるなかで異色だったが、それだけに杉浦の倫理学が期待されていたともいえる。杉浦はのちに、裕仁と良子の結婚に異議を唱えた山県有朋らが惹き起こした宮中某重大事件では、久邇宮家側に味方し、結婚に反対する山県一派と対抗する激しさもみせる。

歴史は白鳥庫吉が担当した。裕仁は歴史に熱心で、白鳥が紹介した箕作元八の著書を放

課後にも読んでいた。当時、白鳥は亡き乃木希典学習院院長に「神話と歴史は別なものであることを、とくと生徒に話したいということを知ってもらいたい」（永積寅彦『昭和天皇と私』）と述べていたといわれ、裕仁もその影響を受けていた可能性は高い。

東宮学問所の博物を担当したのが服部広太郎はつひろたろうである。博物好きだった裕仁にとって、東宮学問所の目に見える具体的な成果は、服部との出会いかもしれない。1875年生まれの服部は裕仁より26歳上、父の嘉仁より4歳上である。菌類を専門にした東京帝国大学講師であった。東宮職御用掛となつて裕仁の生物学の師として知られ、のち1928年新設の生物学研究所の設計にも関わつた。服部は旧尾張徳川藩主家の徳川義親侯爵の指導者でもある。徳川義親は東京帝国大学国史科で木曾林政を論文に書いたが経済史的研究とされ不評で、これに不満をもつた徳川は国史科卒業後に理科に入り、それまで顕微鏡も覗いたことがなかつたが、服部の指導を受けて懸命に学んだ。彼は卒業後は自邸に小さな実験室を作つて、1914年に武蔵小山に徳川生物学研究所を設立し、服部を所長に迎えた。のち徳川生物学研究所は目白の徳川邸内に移され、クロレラなどを開発した。

裕仁が学習院初等学科を卒業し、高輪御所に東宮学問所が設置された年は、徳川生物学研究所設立の年でもあり、その所長の服部が裕仁の博物学の先生となつたのである。この

縁もあって、裕仁と徳川は生物学を介して交流があり、のちの太平洋戦争中には、徳川はシンガポールの昭南博物館長となり、現地で発見した発光カタツムリなどを裕仁に献上している（徳川義親『最後の殿様』、小田部雄次『徳川義親の十五年戦争』）。

生物学研究所

「宮中に生物学の研究室が初めて設けられたのは、大正十四年「1925年」九月であった。初めは赤坂離宮内苑の東隅に、椎の木の森を背景にして、五十坪足らずの瀟洒な平家と、数百坪の圃場と、一棟の飼育室が設けられた」と服部広太郎は「生物学者としての陛下」（『天皇』）に書いている。裕仁がまだ皇太子だったころのことである。翌年の12月に大正天皇が亡くなり、裕仁が天皇に即位する。

天皇となった裕仁は1928年に宮城（皇居）に移り、研究室も吹上御苑の東南隅で、賢所の神域の西側の道路を隔てた旧馬場跡に改築された。建築は簡素ながら、研究室、図書室、準備室、標本室など「二百数十坪」に増築され、広い圃場と飼育舎があった。内部の装飾も簡素だが、研究上必要な器械、器具、薬品などを一通り揃え、必要な参考文献は努めて蒐集した。ここで、昭和天皇は戦前、戦中、戦後と研究を続けた。昭和天皇亡き後も、

平成、令和と研究所は存在し、近年では、令和の天皇が研究所の水田で田植えや稲刈りをしたことが報道された。

服部は生物学研究所での昭和天皇の姿を、敗戦後の1947年にこう記している。

この研究室の創設以来今日に至るまで、陛下は国務其他に御支障の無き限り、毎週土曜日の午前中若しくは午後にも、引きつづいてここに御成りになって生物学上の諸問題に就いて、全く真摯な一学究として冷静な態度で探究されたり、諸学者の既往の業績に対して透徹した批判を下されたりして研究を進められた。それで一旦研究に着手されると相当の成果が得られる迄は、長年月の間倦まず撓まずに同一の問題の検討を継続なされるのが常であつて、能く実験科学の要点ともいふべき、事実即して理論に入るといふことを終始御実践になつてゐられる。恐らく研究室にお出ましになつて、生物特有の微妙な機能を追究したり、虚偽のない自然界の諸現象に親しまれる間だけが、全く世外に超然たる心境にあらせらる事であらうと我々は常に拝察してゐる。

服部は、研究中は無我の境地にいる天皇の姿を見ていた。天皇は戦前・戦中は毎週土曜

だけであつたが、戦後は、毎週土曜のほか、月曜と木曜の午後、公務に支障のない限り研究にいそしんだ。

ヒドロゾア

服部は、昭和天皇の採集について、御苑内や那須御用邸付近の高原地帯では主として変形菌類、葉山御用邸滞在中は相模湾沿岸や沖合に生息する海藻類、貝類、ウミウシ類、ヒドロゾア類を主にし、また行幸先の諸県下でも多数あつたと語る。これらの収集品を詳細に研究して検討し、学問上発表されていない未知の新種と判断したものは、内外の専門学者に資料を送り、さらなる追究を委託し、その学者の名で研究成果を学界に発表してきたという。こうして1947年当時までに発表された動植物の新種は80余種に達し、まだ命名されていないものが20〜30種あるという。これらを大別すれば、植物は細菌類2種、変形菌類8種、海藻類（紅藻類、褐藻類）31種、動物はヒドロゾア17種、腹足類8種、甲殻類3種のほか、冠水母類・管水母類各1種、珊瑚虫類2種ほか、壁蝨類も1種あり、一般にはなじみのない翼鯉類などもある（前掲「生物学者としての陛下」）。腹足類はカタツムリやナメクジの類である。

ヒドロゾアはヒドロ虫綱Hydrozoaの腔腸動物（刺胞動物）の総称で、5目に分けられ、定着性のポリプ型、遊泳性のクラゲ型、ポリプ型からクラゲ型を経て世代交替するものなどがある。人間に利することはほとんどなく、一部に刺胞毒の強いものがある。昭和天皇は、刺胞毒の強いアナサンゴモドキ類に関心を持っていたといわれる。

1976年8月23日の那須御用邸附属邸前庭での記者会見で、天皇は服部の思い出や戦時中の軍部の研究への干渉について、次のように語った。

記者 生物学の服部先生の思い出は。

天皇 服部から、いろいろ教えてもらったのはもちろんのこと、その服部からハイドロゾアの研究をしたらどうかと、変形菌の研究を、植物の方ではしたらどうかというんで。

記者 植物分類学は、服部先生からですか。

天皇 分類学のこととも聞いたが、服部の一番の専門は細菌学。それで変形菌の分類とか、そういう方面を主として聞いた。

記者 顕微鏡でのぞくのは、お疲れてはありませんか。

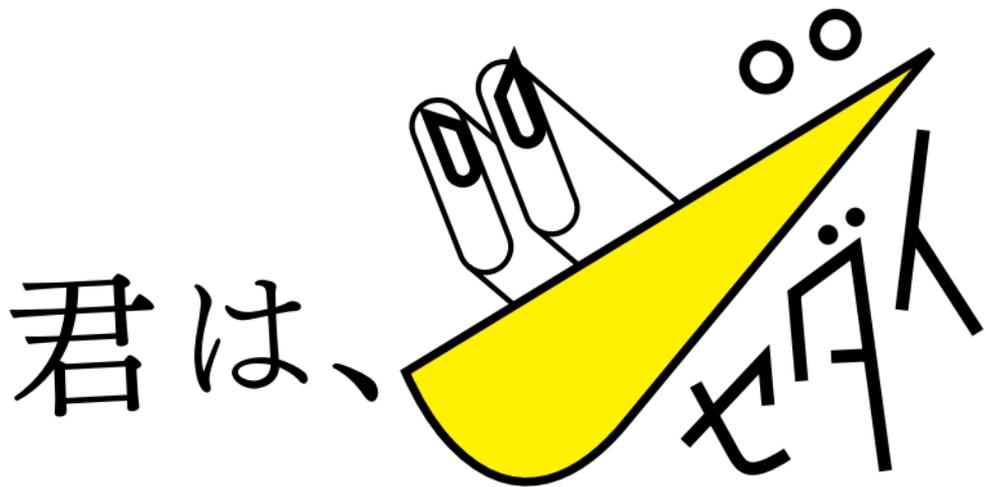
天皇 ええ、やっぱり興味を持っているから、さっきいったように、興味を持っていないから疲れないです。

記者 当時の軍部は、陛下が生物学の研究をしていることに、うるさかったそうです。

天皇 あの頃は、もう非常にやかましくって、ええ、私の名前で発見した新種を出さないほうがいい、という説が出たぐらいで。相当あの当時は、やかましかった。

戦時中の研究は、侍従武官の城英一郎の日記によれば、1943年3月27日まで「御生研」の記事があり、毎土曜日に研究所に通っていたことがわかるが、次は7月24日、8月21日と断片的になり、以後途絶えている。

ついでながら、ハイドロゾアはHydrozoaで、ヒドロゾアのこと。変形菌はアメーバ状の体を変身させてキノコのように胞子をつくる生物で、粘菌、ホコリカビなどともいわれる。昭和天皇のヒドロゾアや粘菌研究は服部の影響が大きかったのである。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!